

2005年2月6日 降誕節(クリスマス)第7主日礼拝

『主の御業を語ろう』

(詩編 124 編 1～8、使徒言行録 12 章 11～19)

ヘロデ王の迫害によって、ヨハネの兄弟ヤコブが剣で殺されました。このヤコブは、ペトロと同じように漁師をしていました。ヤコブと兄弟のヨハネの二人が漁師の仕事を終えて網を洗っている時に、主イエスに声を掛けられました。「わたしに従いなさい」と。二人はすぐに網を捨てて、主イエスに従っていったのです。このヤコブは、主の後を辿るかのように殉教していきました。

さて、ヘロデ王がヤコブを殺害したことは、ユダヤ人に喜ばれたのです。何度かお話ししましたが、ヘロデ王家はユダヤの民衆には人気がありませんでした。生粋のユダヤ人の血筋でないとか、ヘロデ家に纏わる血なまぐさい話のためでした。それでヘロデは、何とかユダヤ人の気を引きたいと考えていたのです。ヘロデ王は、更にペトロをも捕まえて牢に入れました。過ぎ越しの祭りの後で、ペトロを民衆の前に引きずり出して殺そうと考えていたのです。そういえば、主イエスも過越の祭りの後、逮捕され殺されました。あの時と同じように、ペトロを殺そうとしたのです。

ヘロデ王がペトロを殺そうと考えていた前日の夜中でした。牢の中でペトロは、二本の鎖につながれ二人の番兵に挟まれていました。牢を抜け出す望みなどありませんでした。教会では、ペトロのために熱心な祈りが神にささげられていました。けれども、ペトロは祈ることもできず眠っていたのです。昼間、番兵達から暴行を受けて疲れていたのでしょうか。もはや望みを失って神に祈ることもできなかつたのでしょうか。

かつてゲッセマネの園で、イエス様は一晩中祈られました。あの時、主イエスが伴っていったペトロとヤコブ、ヨハネは、祈ることも出来ずに眠っていたのです。「心は燃えても、肉体は弱い」(マルコ 14 章 38)と主イエスが言われたとおり、人間とはもろいものです。その後、ペンテコステの後、生まれ変わった様に大胆に主イエスのことを宣べ伝えてきたペトロでした。大祭司達の前でも決してひるむことなく、福音を語っていたペトロでした。しかしそんなペトロにも、やはりあの時と同じように、人としての弱さが残っていたのです。けれども、主はペトロを見捨てません。主は、御自分のもの達、教会の熱心な祈りを確かに聞いておられたのです。

主は御使いをペトロの元に遣わし、その鎖を解き放ちペトロを牢屋から連れ出したのです。折しも、これは過越の日の前夜でした。出エジプトの日に、主はイスラエルを奴隷の地から救われた。あの日の様に主は、ペトロを牢の鎖から解き放ったのです。

一体何が起こったのか、ペトロには解っていませんでした。主の天使が現れてペトロを牢から連れ出し、衛兵所を通り過ぎて行きました。町に通じる門がひとりで開かれて、ある通りに出てきました。すると急に天使はペトロを離れて行きました。牢から連れ出され町まで出てきて、ペトロはようやく我に返り、何が起こったのか気がついたのです。「今、

初めて本当に本当のことが解った」。主が自分にしてくださったことを理解したペトロは、主にある兄弟達のもとへと向かいました。ペトロが向かったのは、マルコと呼ぶヨハネの母マリアの家です。このマルコは、福音書を書いたマルコではないかと言われていました。

ペトロが帰って来た。ロデという女中が、そう言いました。この知らせは、皆が待ち焦がれていたのではなかったでしょうか。ところが皆、ロデの話信じなかったのです。それどころか、「ロデあなたは気が狂っている」と皆がいうのです。ロデは気が動転してしまったのか、たわごとをいっていると思われたのです。あれほど熱心にペトロの救いを祈り願っていたのに。いざペトロが牢から出て来たと言われても、とても信じられなかったのです。そうです。主イエスが復活なさったときと同じです。キリストは復活なさったと、婦人達から知らせを聞いたとき、弟子たちはどうしたでしょう。あの時も弟子達は、とても信じられず、たわごとを言っているのだと思いました。よみがえりの主が弟子たちの目の前に現れた時でさえも、すぐには信じられなくて、幽霊を見ているのだと思ったのです。

それでもロデは、あれは確かにペトロの声だと強く言い張りました。確かにペトロの声だと。それほど言うなら、それはペトロを守る天使であろうと皆は言い始めました。そんなやりとりがされる中、ペトロはなおも門の戸を叩き続けていました。皆は、ようやく何をすべきか気がついて、門の所に行きました。そして確かめたのです。門を開けてようやくペトロだと解ったのです。ペトロと、ペトロの為に祈るクリスチャン達は、今ここでようやく相まみえることが出来たのです。その姿を見たクリスチャンたちの喜びと驚きは、どれほどのものであったことでしょう。

ペトロは、手を振って皆を静かにさせました。そして静かになったとき、自分の身に何が起こったのかを知らせたのです。

主が、どのようにしてペトロを牢から連れ出してくださったのか。全てを皆に伝えました。身も心も疲れ果てて祈ることも出来なかった時、主は天使を送ってペトロを救い出してくださったのだと皆に知らせました。皆は思いもかけない主の業を聞きました。主の復活と同じように、主の御業はわたしたちには計り知れないものです。けれども、わたしたちの思いも及ばないことを、主は確かなにしてくださいます。それを教会の皆は、確かめることが出来ました。

こうして全て話し終えると、ペトロは言いました。17節：「このことをヤコブと兄弟達に伝えなさい」。このヤコブはヘロデ王に殺されたヤコブではありません。もう一人のヤコブ、すなわち主イエスの兄弟ヤコブです。主イエスの兄弟達は、主イエスが生きておられた時にはイエスを信じませんでした。しかし、主イエスの復活の後、イエスを信じるようになったのです。そして、その一人ヤコブは教会の指導者となるのです。

ペトロはここエルサレムを去って、別の場所に行きました。ヘロデ王の手を逃れるということもありました。それだけでなく、ほかの場所でも主イエスのことを宣べ伝える為です。それは同時に、ペトロがエルサレム教会の指導者を退くことをも意味していました。その役目は、ペトロから主の兄弟ヤコブに引き継がれていきました。

一方、異邦人伝道の為に、パウロやバルナバ達が、神に立てられて行きました。

さて、エルサレムを去ったペトロは、この後巡回して伝道を続けました。ペトロはどこに行っても、変わらずに主イエスの御業を語り続けました。一方、エルサレムに残った教会もまた、主イエスの業を語り続けたのです。時代が変わり世が揺れ動くことは、不安です。わたしたちにはそれを止めることはできません。しかし、たとえどのような時代になっても、主の御業は決して変わることなく成し遂げられて行くのです。ここにわたしたちの希望があります。主は、必ずわたしたちの為に神の国を携えて来られるのです。この約束を、わたしたちは語り続けて行きましょう。主の変わらない約束を信じて歩いて行きましょう。

[説教者：堀地敦子牧師]